

國學院大學學術情報リポジトリ

『日本靈異記』の盲目説話： 古代東アジア圏における信仰と感応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 千紗子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001549

『日本靈異記』の盲目説話

—古代東アジア圏における信仰と感応—

Blind Narrative of The“*Nihon ryoiki*”

—Faith and Induction in the Ancient East Asia—

大塚 千紗子

要旨

日本最古の仏教説話集『日本靈異記』には、病者が諸仏への信仰を契機として病を治癒する説話が載る。そのうち、盲目の母親が薬師如来の木像への帰依によって治癒を得る説話と、東アジア圏に見られる盲目説話を取り上げ、それらに共通する感応の様相と、それを語る手法を検討する。本稿では「郷歌」と、日本の説話文学作品に影響を与えたという『雑宝蔵経』を中心に取上げた。「郷歌」の場合は、千手観音の絵像に眼を賜わるための歌によって盲目が治癒されており、歌によって千手観音から感応を得る。また、『雑宝蔵経』は称名や經典読誦によって仏からの施しを得ると語る。一方、『靈異記』の盲目説話は、仏道への信心の結果とされる感応（＝治癒）が直接的に病者の盲を癒やすのではなく、そこに事物や周囲の人間の介在を要するのである。『靈異記』の病治癒譚は、漢訳仏典の世界における信仰の様相を基盤として種々の經典の効能を記しながらも、諸仏への至心とそれに心動かされた周囲の人々の援助を媒介させる展開を形成していた。『靈異記』の盲目説話は、東アジア仏教圏の感応譚を享受しつつ、そこに人間の善行を奨励させるための意図をもつ説話であると位置づける。

摘要

日本最早的佛教说话集《日本灵异记》，收录了颇多病人因信奉诸佛，而使病得以痊愈的故事。本文列举了其中的盲人因其母亲皈依药师如来木像而重见光明，以及东亚圈的盲人故事，并探讨其共通的应验诸相及其叙事手法。拙稿以“乡歌”和给予日本说话文学作品影响的《杂宝藏经》为中心展开讨论。

キーワード：日本靈異記 病 盲目 宿業 郷歌

关键词：日本灵异记 病 盲眼 宿业 乡歌

“乡歌”部分，列举了吟唱千手观音的画像求蒙赐双眼的和歌，而使盲目得以治愈的故事，即因和歌而获得千手观音感应的故事；《杂宝藏经》部分，则列举了因念佛诵经而获得施与的故事。另一方面，《日本灵异记》的盲人说话故事，并不是因对佛教的虔诚信仰所获得感应（=治愈）来直接治愈盲人盲眼的，而是需要周围人与事的介入的。《日本灵异记》的治愈故事，记述了以汉译佛典世界的信仰与诸相为基础的种种经典的应验故事，这种感应形成于对诸佛的虔诚，以及被感动的周围人们的援助之中。《日本灵异记》的盲人故事是在吸收了东亚佛教圈应验故事的同时，作为一种鼓励人们善行的佛教故事而存在着。

1 はじめに

奈良朝末期である延暦年間から平安朝弘仁年間にかけて編纂された『日本霊異記』（以下、『霊異記』）は、善悪の行動によって起こる応報を、仏教思想や教義に拠りながら説くことを主眼とする仏教説話集である。『霊異記』には病者が諸仏への信仰を契機として、病を治癒するという説話があり、これらの説話は、病に際した衆庶の信仰を獲得するという仏教説話特有の機能がある。

本稿では、盲目の母親が薬師如来の木像への帰依によって視力を得たという話を中心に、東アジア圏を視野に入れて母子の盲目説話を取り上げ、共通する感応の様相とそれを語る手法を比較検討する。『霊異記』が東アジア圏において共有される感応譚を享受し、日本国の奇瑞として語る際、どのように展開を遂げたのかを論じるものである。

2 盲目の母

本稿の考察対象として『霊異記』下巻第十一縁（以下、本縁）を挙げる。これは盲目の女が、蓼原堂の薬師仏への祈願によって視力を得たことを記す説話である。

二つの目盲ひたる女人の、薬師仏の木像に帰敬して、以て現に眼を
明くこと得し縁

諾楽の京の越田の池の南の蓼原の里の中の蓼原堂に、薬師如来の木像在

り。帝姫阿部の天皇のみ代に当りて、其の村に二つの目ながら盲ひたる女有りき。此れが生める一の女子、年は七歳なりき。寡にして夫無し。極めて窮れること比無し。食を索むること得ずして、飢ゑて死なむとす。自ら謂へらく、「宿業の招く所ならむ。唯に現報のみには非じ。徒に空しく飢ゑ死なむよりは、善を行ひ念ぜむには如かじ」とおもへり。子をして手を控かしめて、其の堂に迄り、薬師仏の像に向ひて、眼を願ひて曰さく、「我が命一つを惜しむに非ず。我が子の命を惜しむなり。一旦に二人の命を已へむ。願はくは我に眼を賜へ」とまうす。壇越見矜みて、戸を開きて裏に入れ、像の面に向ひて、以て称礼せしむ。逕ること二日にして、副へる子の見れば、其の像の臆より、桃の脂の如き物、忽然に出で垂る。子、母に告げ知らず。母、聞きて食はむと欲ふが故に、子に告げて曰はく、「搏りて吾が口に含めよ」といふ。之を食へば甚だ甜し。便ち二つの目開きぬ。

定めて知る、心を至して発願すれば、願として得ずといふこと無きことを。是れ奇異しき事なり。(1)

蓼原の里に盲目の寡婦がおり、この女は娘と二人暮らしで生活に困窮していた。女は盲目と困窮の理由が、自身の「宿業」という宿世における自身の罪に拠るものと認識する。この「宿業」とは、前世において為したとされる罪への観念である。『靈異記』説話においては、宿業の原因となる罪の内実は知られないままに、諸仏への信仰を経由として病の治癒を達成する(後述)。女は蓼原堂の薬師仏に向かい、自身の命ではなく娘の命を助けるために治癒を願う。堂の壇越はその姿を見て哀み、女を堂の中に入れ薬師仏の前で称来させた。二日後、娘は薬師仏の胸から「桃の脂の如き物」(2)が垂れたのを見て女に教える。それを嘗めると女は視力を得たという。この桃脂はあくまでも薬師観音への感応を形象としたものであるが、あたかも母乳の如きに滴り落ちる様子には母の慈愛の投影を想起させる。『靈異記』は母の慈愛を礼讃す

(1) 『日本靈異記』の引用は、中田祝夫校注『日本靈異記』(新編日本古典文学全集 10、小学館、1995年9月)に拠る。

(2) 「桃脂」について狩谷掖斎は「桃脂一名ハ桃膠 和名毛ノ乃夜迺」と指摘する(狩谷掖斎『日本靈異記攷證』正宗敦夫編『狩谷掖斎全集二』日本古典全集、1925年1月)140頁。また、「桃の木を傷つけた場合、傷口より出る水飴状のやに」(前掲注1同書、二七四頁頭注)と指摘されるように樹皮から出る膠状の物であるようだ。『浄土三部経音義集卷』無量寿経卷上「琥珀」の項目には、琥珀の生成過程において桃脂と琥珀の形状が類似すると記されている。「琥珀 経音義曰。法華経云。虎魄四白反。廣雅魄珠名。漢書關国有虎魄。案博物志云。松脂入地千年化為茯苓。茯苓千年化為虎魄。一名紅珠。廣志云。虎魄生地中。其上及旁不生草。深八九尺。大如斛。削去上皮。中成虎魄有汁。初如桃膠。」(『大正藏』卷五十七、三九四b)。

る傾向にあることから⁽³⁾、生命を育むための母乳について古代の呪的イメージが重ねられていることが指摘される⁽⁴⁾。本縁では薬師観音の仏像が与える慈悲が人間の母が母乳を与える慈悲の姿に重ねて表されているのである⁽⁵⁾。結語には「定めて知る、心を至して〔至心〕発願すれば、願として得ずといふこと無きことを。」と記すように、女の「至心」という薬師如来への熱心な信仰心による発願が治癒の奇瑞を顕したと説明しているため、説話の核には薬師仏への信仰と病者の願があるだろう。

本縁の信仰の様相は、奈良朝仏教における薬師信仰が背景としてある。『続日本紀』記事の孝謙朝には「薬師経に帰して行道懺悔す。冀はくは、恩怨を施し、兼ねて人を済はむと欲ふ。」（巻十八・孝謙天皇、天平勝宝二年四月）と見え⁽⁶⁾、この「薬師経」とは『薬師琉璃光如来本願功德経』に当たるとされている⁽⁷⁾。さらに同年記事には薬師経に帰依した懺悔と同時に「仍て天下に大赦し」（孝謙天皇、同年記事）と記すことから、薬師経典は大赦と密接に関わりながら⁽⁸⁾、仏教国家の統制において利用されていた。一方で民間における薬師信仰は、「滅罪信仰を媒介として治病延命の功德にあずかろう」⁽⁹⁾という方向性にあり、山に籠もって仏道を修する山岳修行と結びつく。本縁における薬師信仰の在り方は、里中にある「蓼原堂」という場所から考えれば、民間信仰に近いものであるだろう⁽¹⁰⁾。薬師経典と本縁の関わりについて松浦貞俊氏は、以下に挙げる経典の大願の内容が本縁の境遇と当て嵌まることを指摘している⁽¹¹⁾。

-
- (3)『靈異記』上巻第二十三縁は母乳を養育の対価として語り、中巻第二縁は死に際した息子が「母の甜キ乳」を要求する。
- (4)守屋俊彦「母の甜き乳—日本靈異記の女性—」（『日本靈異記の研究』三弥井書店、1974年5月）、多田一臣「母の甜き乳をめぐって」（『古代文学の世界像』岩波書店、2013年3月）。
- (5)武田比呂男「仏像の靈異—『日本靈異記』における〈交感〉の一面—」（『日本文学』第四十五号、1996年5月）。
- (6)『続日本紀』の引用は、青木和夫ほか校注『続日本紀』三（新日本古典文学大系14、岩波書店、1992年11月）に拠る。他の薬師関係記事は、聖武天皇（巻十六・天平十七年九月）、孝謙天皇（巻十八・天平勝宝三年十月）、孝謙天皇（巻十九・天平勝宝六年十一月）がある。
- (7)前掲注6、脚注104頁。
- (8)渡辺宏治「薬師経受容についての一考察—一般記事との関連を中心に—」（『人文論究』第三十九巻第三号、1989年12月）。
- (9)五来重「薬師信仰総論—薬師如来と庶民信仰—」（五来重編『民衆宗教史叢書 薬師信仰』12、雄山閣、1986年11月）。
- (10)本縁は「蓼原堂」に参詣するのみだが、下巻第三十四縁の宿業の女は「大谷堂」へと居住を移転しており、堂が病者を住まわせる看護施設として機能していたようである。『今昔物語集』巻二十・三十五話は、破戒僧が仏罰として「白癩」という身体に白い斑ができる皮膚病に罹り、家族からも見放されるという説話である。破戒僧であれば「業病」を受けるのであり、集団社会から放逐をされるという例である。
- (11)松浦貞俊校注『日本國現報善惡靈異記註釋』（大東文化大学東洋研究所叢書9、1973年6月）

1. 第六の大願とは、願くは我れ来世に菩提を得ん時、若し諸の有情の其身下劣にして諸根不具・醜陋頑愚・盲聾瘖瘂・攣臂背偻・白癩癡狂、種種の病苦あらん。我が名を聞き已らば一切端正點慧にして諸根完具し諸の疾苦無きことを得ん。⁽¹²⁾

(『薬師琉璃光如来本願功德経』)

2. 第七の大願とは、願くは我れ来世に菩提を得ん時、若し諸の有情に衆病逼切して救ひ無く帰する無く医無く薬無く親無く家無く貧窮多苦ならんに、我が名号一たび其の耳に経れんに、衆経悉く除こり身心安樂にして、家属資具悉く皆豊足し、乃至無上菩提を証得せん。

(同上)

3. 世尊薬師琉璃光如来の名号を聞きなば、此の善因に由つて今復、憶念して至心に帰依すれば、仏の神力を以つて、衆苦より解脱し、諸根聡利に智慧多聞あつて恒に勝法を求め、常に善友に遇ひ、永く魔網を断ち、無明の殻を破し、煩惱の河を竭し、一切の生老病死憂愁苦悩を解脱せん。

(同上)

1の大願には、身体的な疾患の病症が列記される。「醜陋頑愚」とは姿形が醜く、愚かで強情な状態を指す。「盲聾瘖瘂」とは盲目と聾啞を指し、「瘖瘂」とは話すことの出来ない人間を指す。「攣臂背偻」とは、身体が瘖攣等によって攣り歩く姿や背が曲がった状態であり、通常の歩行が困難な人間を指すと考えられる。「白癩癡狂」の「白癩」とはハンセン病の古名である。「癡狂」は精神の錯乱状態を指すことから、精神疾患として捉えられる。病者はその身が下劣であり、「諸根不具」という眼・耳・鼻・舌・身・意識のうちの認識器官の障害を受けているといい、薬師琉璃光如来への帰依によってこれらの病苦から解放されると教えるのである。無論こうした身体への疾患や容姿の特徴、精神疾患とが病者の罪業を原因とする言説は、仏教側が信徒を獲得するために機能した反面、白癩が所謂「業病」として偏見や差別を受ける原因ともなった⁽¹³⁾。2の大願は衆生の貧困を救済する内容である。本縁の女の疾患は1の大願に、女とその娘の困窮の境遇については2の大願とが当て嵌まる。3は大願の項目ではなく、薬師信仰への帰依を推進させる文言

368 頁附言。

(12)『薬師琉璃光如来本願功德経』の引用は、『国訳一切経 印度撰述部 経集部十二』(大東出版社、1932年3月)に拠る。なお、『大正蔵』の該当箇所は、1(巻十四、四〇五a)、2(巻十四、四〇五a)。

(13)井上正一『『壹異記』にみる「業」思想の民間受容—仏教的差別観の形成—』(朝枝善照編『論集奈良良教 律令国家と仏教』2、雄山閣、1994年7月)。

である。注目すべきは「憶念して至心に帰依」することによって「一切の生老病死憂愁苦悩」から解放されるとあり、本縁結語と共通する「至心」の語による信心の推奨が説かれることである。本縁が薬師如来への帰依のみではなく、一心の発願である「至心」を併記するということは、この至心の願によってこそ成し遂げられるという意識が存するものと考えられる。この点について以下節を改めて、他の盲目治癒説話を併せて検討したい。

3 盲目治癒説話における願

『靈異記』には本縁を含めて盲人の話が三例あり、他も本縁と同様に仏教帰依によって平復を得たと語るものである。

4. 奈良の京の薬師寺の東の辺の里に、盲ひたる人有りき。二つの眼ながら精盲なりき。観音に帰敬し、日摩尼手を称念しまつりて、眼の闇を明さむとしき。昼は薬師寺の正東の門に坐し、布巾を披き敷きて、日摩尼手のみ名を称礼せり。往來の人の、見哀ぶ者、錢・米・穀物を、巾の上に施し置く。或いは港陌に坐して、称礼すること上の如し。日中の時に、鐘を打つ音を聞きて、其の寺に参り入りて、衆僧に就きて飯を乞ひ、命活きて数年を経たり。帝姫阿倍の天皇のみ代に至りて、知らぬひと二人來たりて云はく、「汝を矜むが故に、我二人、汝の盲ひたる目を治めむ」といふ。左右各治めりて、語りて言はく、「我、二日逕て、必ず是の処に来らむ。慎待つことを忘れずあれ」といふ。其の後久しくあらずして、倏に二つの眼ながら明きて、平復すること故の如し。期りし日に当りて待つに、終に復來らざりき。賛に曰はく、「善きかな、彼の二つの目ながら盲ひたる者。現生に眼を開き、遠く太方に通ず。杖を捨て手を空しくして、能く見、能く行く」といふ。誠に知る、観音の徳力と盲人の深信となることを。
(『靈異記』下巻第十二縁)

5. 沙門長義は、諾楽の右京の薬師寺の僧なりき。宝龜三年の間に、長義、眼闇み盲ひて、五月許逕たり。日に夜に恥ぢ悲しびて、衆僧を屈請し、三日三夜、金剛般若経を読誦しき。便ち目開き明かにして、本の如くに平ぎき。般若の験力、其れ大きに高きかな。深く信じて願を發せば、願として応ぜずといふこと無きが故になり。

(『靈異記』下巻第二十一縁)

4は、本縁の次話である「二つの目盲ひたる男の、敬みて千手観音の日摩尼手を称へて、以て現に眼を明くこと得し縁」である。男は観音を信じ敬い、薬師寺の東の正門の前で日摩尼手を唱え念じる。行き来する人々は男を憐れんで、金銭や食物など施す。また、薬師寺に行つては僧達から食料の施しを得て数年を過ごしていた。こうして糊口を凌ぎながら日摩尼手を唱えた数年後、男の元に知らぬ人二人が現れて男の目を治癒させる。この説話に付される賛は、盲人が現世利益を得たことを賞賛する。それに続いて「誠に知る」以下は、病治癒までの因子が観音の力と、盲人の深信によってなるものと記しており、観音の力のみでは、盲目治癒への道は開かれぬということを示している。

『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼經』には「若為眼闇無光明者。当於日精摩尼手。」⁽¹⁴⁾と見え、盲目の者には日摩尼手を用いることが説かれるように、盲目治癒の方法に、經典内容の思想背景があることが理解できる⁽¹⁵⁾。しかし經典の威力の他に、盲人の信心が強調され、最終的には見知らぬ人の登場によって治癒したと記述する。

5は「沙門の一つの目眼盲ひ、金剛般若經を讀ましめて、眼を明くこと得し縁」で、4と同じく薬師寺が舞台であり、薬師寺の僧である長義が盲目となる。長義は病を患ってから日夜恥じ悲しみ、多くの僧を呼んで三日三晩の金剛般若經の誦經を要請する。これによって僧長義の眼は元のように回復した。5の説話に賛は付されないものの、結語には般若經の靈驗を賞賛すると同時に、長義の信心による願の結果であることを反語表現によって記す。4、5は対象となる仏教經典と盲人の信仰心との両方を称賛しているのである。

このような病氣治癒と病者の信仰心を語る『靈異記』の説話について、小泉道氏は

信心による病氣治癒譚において、病人の発心する場合の常套句である。いづれも、医薬未発達の時代の衆庶の生老病死に対する不安を基盤に、

(14)『大正藏』(卷二十、一一一a)。同經典に「著其人乳要須男孩子母乳。女母乳不成。其藥和竟。還須千眼像前呪。一千八遍。著眼中滿七日。在深室慎風。眼睛還生。青盲白暈者光奇盛也。」(『大正藏』卷二十、一一〇b)とあり、男児を産んだ母の母乳を薬に使用し、眼病を患った者は薬を飲んで千眼像の前で呪すという。

(15)千手観音系の經典には、桃脂や桃の實の病に対する効能が記されている。『千手千眼観世音菩薩治病合藥經』の「若有人等亦血痢血者。取桃脂大如鷄子。呪三七遍令吞即差。」(『大正藏』卷二十、一〇五a)は、赤痢への対処法として鷄の卵ほどの桃脂をとり、經文を二十一回繰り返して唱える。また『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼經』に「若患惡瘧入心悶絕欲死者。取桃膠一顆。大小亦如桃顆。清水一升和煎取半升呪。七遍頓服盡即差。」(卷二十、一一〇b)とあり「惡瘧」という筋肉が引き攣る病には、桃膠を一粒取り清水で煎じるといふ。本縁の桃脂は、漢訳仏典の招來と受容に伴って生じた薬師信仰と観音信仰とが混交の結果として考えられる。

はじめて成立し得た説話群であるが、同時に本書の、あるいは(当時の) 仏教思想の問われるべき根幹に関わる説話でもある。⁽¹⁶⁾

と指摘している。民衆がその病への対処として医薬や医療を求めたとしても、困苦によって十分な治癒が施されなかった可能性も十分にある。また当時は、病者への扶助が規程として定められているものの、実質は機能不全の状態であったことが本縁を通して指摘される⁽¹⁷⁾。信心に際した常套句に「誠に知る、願ひて得ざる事無しと者へるは、其は斯れを謂ふなり」(中巻第二十一縁)、「闇かに知る、願として得ずといふこと無く、願として果さずといふこと無しと者へるは、其れ斯れを謂ふなり」(中巻第三十一縁)と、病者の心願を繰り返すことは、当時の状況から要請された記述であり、願によってこそ救われるという一縷の望みの結実ともいえる。そのために、『靈異記』は願によって感応を得ることを強調したであろう⁽¹⁸⁾。このように『靈異記』の盲目治癒説話は、病苦に起因した諸仏への信仰を基本としつつ、盲人の「至心」や「深信」を必須としている。

4 「郷歌」にみる母子の盲目譚

前節では盲目治癒説話における病者の願の在り方が、薬師經典の内容と合致すること、病治癒説話の性格は漢訳仏典、ひいては東アジア仏教圏からの思想によってもたらされたものであることを確認した。本縁の盲目説話を考えるにあたり、その主題とモチーフに注目すれば、「盲目」、「母子」、「仏教や經典による救済」を挙げることができる。そこで本節では、主題の共通性から視点を広げ古代朝鮮の歌謡を収載する「郷歌」を比較対象とする。ここには、「禱千手大悲歌」という母と娘をめぐる盲目の逸話と歌が収録されている。

5. 景德王の代、漢岐里の女たる、希明の兒、生れて五稔にして忽ち盲す。一日、其の母は兒を抱きて芬皇寺の左殿の北の壁に画ける千手大悲の前に詣り、兒をして歌を作り之を禱らしめたるに、遂に明を得たり。其の詞に曰く、

(16) 小泉道校注『日本靈異記』(新潮日本古典集成 67、新潮社、1984年12月)付録「聾者と宿業」370頁。

(17) 寺川眞知夫『『靈異記』研究の視点』(『日本国現報善悪靈異記の研究』研究叢書 180、和泉書院、1996年3月)。

(18) 前掲注 17 同書「発願の深さ、信心の力を称える景戒の好みの句」160頁。

膝盼古召称。二戸掌音毛乎支内良。 跪いて、両手を合わせながら、
千手観音叱前良中。祈以支白屋尸置内乎多。

千手観音の前にお祈り申し上げます。

千隠手口叱千隠目盼。 千の手を、千の目を、
一等下叱放一等盼除悪支。 一つ取り放して、一つ取り除いて、
二千万隠吾羅。 二つでは多いので、
一等沙隠賜以古只内乎叱等邪阿邪也。

一つだけひそかに下さって、直してくださいよ。

吾良遺知支賜尸等焉。 ああ、私に下さるのでしたら、
放冬矣用屋尸慈悲也根古。

観音様の目を離して下さるのなら、その施された慈悲はとても大きいことでしょう。

賛に曰く、竹馬葱笙、陌塵に戯る。一朝、双碧、瞳を失ふの人。大士の
慈眼を廻らすに因らずんば、虚しく度らん、楊花、幾社春。⁽¹⁹⁾

新羅三十五代王である景德王代の頃、漢歧里に住む希明という名の母と、その娘がいた。娘は五歳の時に盲目となる。母は盲目となった娘を憐れみ、娘を抱いて芬皇寺の千手観音の図像の前に連れてゆき、千手観音に眼を賜わるための歌を作って娘に歌わせる。すると、その歌によって子の盲目が治癒される。經典の読誦ではなく歌によって千手観音の眼を賜りたいと懇願するのであり、観音からの慈悲の結実を眼の治癒としている。歌の後の賛は、「竹馬葱笙」という竹の馬と葱の笛で遊んでいた子が視力を失ったが⁽²⁰⁾、観音の慈悲によって回復したと讃嘆する内容である。この「禱千手大悲歌」と『靈異記』本縁との共通点は、①仏像や仏画への信仰を通して盲目の治癒を得るといふ仏教の要素を基盤とする点、②母子のみで父が登場せず、母から娘への慈愛によって治癒を願う点、③「目」（郷歌）「胸・桃脂」（本縁）など、諸仏の身体における慈悲の象徴を通して、靈験を感得する点である。これと反対に相違点としては、①信仰の対象が千手観音である、②母ではなく娘の盲目を治癒する、③読経ではなく歌によって治癒を願う、④本縁は宿業の病を原因とする、という点があげられる。相違点は以上のようにあるものの、信仰を基盤として盲目を治癒する感応を語るという枠組みの中で両者は共通

(19)「郷歌」の引用と歌謡現代語訳は、中西進・辰巳正明編『郷歌 注解と研究』(新典社選書、新典社、2008年11月)に拠る。歌謡内の口は底本の欠損を示す。散文部訓読文は『三国遺事』(『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部十』大東出版、1967年)を参考として訓読を施した。

(20)前掲注19、『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部十』「竹にて作れる馬。葱にて作れる笛。ともに小児の玩具なり。」462頁。

性を持つ⁽²¹⁾。この「禱千手大悲歌」について『郷歌 注解と研究』は、千手観音信仰による盲目治癒説話である『靈異記』下巻第十二縁（本稿用例4）との関連性を示唆しているが、その相違点について次のように指摘している。

『日本靈異記』下巻第十二縁に見る「二つの目盲ひたる男、千手観音の日摩尼手を敬み称へて、現に眼を明くることを得る縁」は、薬師寺の近くに住む盲人が千手観音の日摩尼手に祈願し、両眼が見えるようになった話であるが、注意すべきことは、観音を信仰したので視力が回復したとされずに、観音を信仰したので治癒する人がやって来て治したとされていることである。⁽²²⁾

下巻第十二縁は盲人の前に「知らぬ人二人」が来て眼を治そうと語る。本縁も含めて『靈異記』の病者を巡る説話は、治癒までの様々な過程が段階的に示され、治癒までの因子は經典の読誦のみでなく、様々な媒介とされる人々が登場する。上記の指摘に拠りながら、この点について簡略に示したものが以下である。

本縁 「薬師如来への称礼」→〈壇越〉→《薬師木像からの桃脂》

用例4 「千手観音と日摩尼手を読経する」→〈知らぬ人二人〉

用例5 「金剛般若と読経」→〈衆僧〉

上記のように『靈異記』は盲人の信心を発端としながら、その信心と治癒までに第三者の人間を要している点に特徴があるといえる⁽²³⁾。一方、先に見たように「郷歌」の場合、母の慈愛から端を発し、治癒を求める願は歌によって千手観音からの靈験を得ることになる。『靈異記』と「郷歌」とは盲人の願を発起として、仏への願が如何にして到達されるのかといった方法の道筋が示されているのであり、両者には病苦に際した困難及び祈願による現世利益の共通性を見ることができる。

(21)「郷歌」は一然撰『三国遺事』に収載されており、そのうち巻五「貧女養母」(『大正藏』卷四十九、一〇一八c)は生活に貧窮した盲目の母とその娘が他者の援助によって困苦から救済される様が描かれている。娘の孝養を軸として語りつつ、孝養心を動かされた人々の援助による寺院の縁起譚として形成されている。「貧女養母」には、仏教への信仰による感応は示されず、むしろ儒教的な孝養の趣が強い。花郎や王の慈善行為による具体的な救済の手立てを語る。『三国遺事』は『靈異記』よりも時代が下るために、直接的な影響関係は認め難いものの、盲目の苦難と母子の恩愛の主題の共通性がある。

(22)中西進・辰巳正明編『郷歌 注解と研究』(新典社選書 22、新典社、2008年11月)106頁。

(23)用例4の類話は『今昔物語集』巻十二に採録されており、そこでは「知らぬひと二人」を観音が変わった姿であると語る。

5 『雑宝蔵経』に見える盲目説話

前節では「郷歌」「禱千手大悲歌」に見える母子の盲目と治癒の因子について、『靈異記』説話との比較を行った。盲目は苦悩や困難の象徴としての普遍性を持つ故に、その困苦を逃れるための願が求められた。本節では更に、東アジア仏教圏における盲目譚を取り上げて比較をする。そこで、北魏に成立し、諸種の因縁・譬喩・本生等の物語を集録し、『靈異記』や『今昔物語集』に影響を与えたという『雑宝蔵経』を挙げる。

6. 差摩釈子は眼を患ふるを以ての故に、種種の色あるも之を見ることを得ず。差摩釈子即ち世尊を念じて、南無與眼者・南無與明者・南無除闇者・南無執炬者・南無婆伽婆・南無善逝と。仏は淨き天耳の人耳に過ぎたるを以て其音聲を聞きたまひて、阿難に告げて言はく、汝去け、今章句を以て差摩釈を擁護し、為に救を作し守を作し牧を作して災患を滅除し、四衆の為に利を作し益を作し安樂住を作さしめんと。爾時に世尊は差摩釈の為に淨眼 修多羅を説きたまへり。

多折他 施利 弥利 棄利 醯醯多

此淨眼呪を以て差摩釈の眼をして清淨なることを得せしめ、眼膜除くことを得たり。⁽²⁴⁾

(『雑宝蔵経』卷第六、差摩子目を患ひ三宝に帰依して眼淨きことを得たるの縁)

6は、仏を信奉する差摩釈子という者が眼の治癒を願い、「南無與眼者・南無與明者」と念じる。世尊はその声を聞くと弟子阿難に差摩釈子を救わせ、安樂なる住処を与えることを命じる。さらに世尊は淨眼のための「修多羅」である經を説く。また、「是の如く差摩釈をして名を稱へしめ、余人も亦称名せよ、眼淨きことを得ん。眼淨きことを得已りて、闇を除かしめ、膜を除かしめん。」と記されている。これは仏に帰依することによる眼病治癒の方法であり、仏の名を称名することによる直接的な感応を示している。

また、『雑宝蔵経』には盲目の父母を養う仙人の話も収められている。こちらは盲目の父子への孝養による感応譚としての性格が強い。

7. 佛言はく。昔迦尸国王土界の中に一大山あり、中に仙人ありて跋摩迦と名く。父母年老ひて眼俱に盲たり、常に好菓鮮花美水を取り以て父母

(24)『雑宝蔵経』の引用は、『国訳一切經印度撰述部本縁部一・二』(大東出版社、1931年6月)に拠る。『大正藏』(卷四、四四八b～四四九a)に該当する。

を養ひ、閑静無怖畏の處に安置せり。(中略)時に梵摩達王遊獵して行くに鹿の水を飲むを見、弓を挽き之を射しに、葉箭誤りて睽摩迦の身に中り、毒箭を被りぬ。(中略)是に於て、王は盲父母を將ひて、往き睽摩迦の邊に至れり。既に児の所に至りて胸を懊惱し、号咷して言く、我子は慈仁にして孝順なること比無しと。

天神地神山神樹神河神池神諸神偈を説きて言く、
積梵天世王は 云何ぞ佐助せざるや、
私の孝順の子をして 此の如く苦ましむるや。
深く我孝子に感じて 速に命を救済せよ。⁽²⁵⁾

(『雜寶藏經』卷第一、王子肉を以て父母を濟ふの縁)

右は、仙人睽摩迦と盲目の父母との物語である。睽摩迦は盲目の父母を養っていたが、ある時、遊獵に来ていた梵摩達王の弓矢が睽摩迦に当たってしまう。王は睽摩迦の父母を探して、睽摩迦の元へと連れて行く。息子の事態に父母は懊惱して嘆き、我が子の仁慈と孝順なる様は比類無きものと語る。すると、父母の嘆きが天神、地神、山神などの神々に届き、神々は睽摩迦の孝順心を讃えた偈を説く。その偈は帝釈天(釈提桓因)にまで届き、睽摩迦の傷を平復させたという。右の例においては、差摩釈子が眼の治癒を仏へ祈り、盲目の父母の一心の願が帝釈天へと届くのである。盲人自身や、盲人がその家族を救済するための願いは、仏や帝釈天といった者達へ直接的に届き、それらに応じた感応を得ることが語られている。それは、先掲の「郷歌」が呪歌を用いて感応を導くよりも、より直接的な方法であるだろう。「郷歌」では呪歌により、観音との感応を達成したことを表しているのに対し『雜寶藏經』では盲人の祈りの行為によって帝釈天、世尊へと届き、帝釈天や仏との感応を語るのである。

このように、盲人とその救済をめぐる種々の方法はテキストや説話によって多様な拡がりを持つのである。その中において『靈異記』の盲人は、他者の介在を以て救済を得ており、尚且つそこに「宿業」の觀念を用いていることに注意する必要がある。

(25)『大正藏』(卷四、四七八c)。

6 『靈異記』の宿業の病と感応

本縁の母には前世において為した罪である「宿業」がある。『靈異記』には宿業の説話が本縁を含めて三例あり、全て宿業による病を語る。二節で取り上げた他の盲目治癒説話に「宿業」の語は用いられていないが、本縁は盲目治癒と宿業の観念を併せ持つ説話であるため、病と宿業との関わりを説く以下の二話を参考としたい。

8. 義通は忽に重病を得て兩つの耳並に聾ひ、悪瘡身に遍はり、年を歴れども愈えざりき。自ら謂へらく「宿業の招く所なり、但に現報のみに非じ。長生して人の為に厭はれむよりは、善を行ひて過ニ死なむには如かじ」とおもふ。乃ち地を・ひ堂を飭り、義禪師を屈請せむとす。先づ其の身を潔くし、香水を澡浴ミテ方広経に依りき。(中略)後に禪師重ねて拝するに依りて、片耳既に開けぬ。義通歡喜して亦重ねて更に拝せむことを請ふときに、兩つながら耳俱に開けぬ。遯く近く聞く者、驚き怪しびずといふことなかりき。是に知る、感応の道諒に虚しからぬことを。

(『靈異記』上巻第八縁)

9. 巨勢皆女は、紀伊国名草郡埴生の里の女なりき。天平宝字の五年の辛丑に、怨病身に嬰り、頸に瘰癧を生じ、大苺の如し。痛苦切るが如くにして、年を歴て愈えず。自ら謂へらく、「宿業の招く所ならむ。但に現報のみに非じ。罪を滅し病を差すよりは、善を行はむには如かじ」とおもへり。髪を剃り戒を受け、袈裟を著て、其の里の大谷堂に住む。心経を誦持し、道を行ふを宗とす。十五年逕て、行者忠仙、来りて共に堂に住む。忠仙此の病相を見て相憫び、病を看て咒護し、願を發して言はく、「是の病を愈さむが為に、薬師経・金剛般若経各三千卷、觀世音経一万卷、觀音三昧経一百卷を読み奉らむ」といふ。十四年歴て、薬師経二千五百卷、金剛般若経千卷、觀世音経二百卷を読み奉る。唯し千手陀羅尼は間無く誦せり。未だ卷数に満たぬに、病を受けし歳より以来、逕ること二十八年、延暦の六年の丁卯の冬の十一月二十七日の辰の時に至り、瘰・の癰疽、自然に口開き、膿血を流し出し、平復すること願の如くなりき。実に知る、大乘の神咒の奇異しき力と、病人行者の功を積める徳となることを。「無縁の大悲は、至感の者に、異形を播ス。無相の妙

智は、深信の者に、明色を呈す」と者へるは、其れ斯れを謂ふなり。

(『靈異記』下卷第三十四縁)

8の義通という男は自身の病の原因は宿業にあると認識し、現世での病の完治を諦めて仏道に帰依しようとする。義通は、義禪師を呼び『方広経』を読経してもらうことによって病が治癒する。義通と禪師の功德について「感応の道諒に虚しからぬことを」と評しており、仏教帰依が感応の道に通じ、病者の信仰心と禪師（『方広経』）との功德によって完治が達成したと説く。9は、巨勢帛女という女の首に大きな腫瘍ができる。帛女はこれを自分の「宿業」が原因であると考え、剃髪をして戒を受け、大谷堂に移り住んで仏道修行をする。十五年後、行者である忠仙が現れ、彼の発願と帛女の修行によって二十八年後に腫瘍が癒えたという。この説話も、病者である帛女のみではなく、その姿に哀れみを覚えた行者の登場によって快癒へと展開する。武田比呂男氏は、『靈異記』の宿業は修正が可能なものとして「宿業としての〈やまい〉が、来世での救済を志向する契機となっているという意味では、往生志向の可能性をはらんだ説話とみることができるのではないか。」⁽²⁶⁾と指摘するように、病者は「宿業の招く所」という常套句によって罪を自覚し、病の治癒を最優先するのではなく、善行に勤めようと志す。宿業の滅罪方法は、病者の自覚を契機とした仏道修行にある。その上で、宿業を背負った病者にもその信心の姿に哀れみを覚えた人間の介在が生じ、そこから罪を滅するための周囲の働きかけが描かれているのである。つまり、盲目や宿業の病を通して救済を語る上で、『靈異記』は他者を媒介とすることを必須、特徴としていえると考えられる。先述のように、本縁ではその役割が壇越であった。病人の經典読誦だけで願いは遂げられず、信心の強さに心を動かされた周囲の人間の介在が快癒への要因として現れてくるのである。この説話展開としての要因は、『靈異記』というテキストの主題と関わるものであろう。『靈異記』は各序文において、人々へ悪行を戒めて善行を奨励する。「深く信じて善を修め、以て生きながら祐に霑ふ。」（『靈異記』上巻序文）という善行と信心によって、世に起こる悪行の抑制を呼びかけたのである。既に『靈異記』編者と目される景戒の存した時代は末法の世であり、僧職の濫行も蔓延る状況であったことは『日本後紀』の延暦年間⁽²⁷⁾記事から知られる。『靈異記』

(26) 武田比呂男「『日本靈異記』にあらわれた〈やまい〉」(大野順一先生古稀記念論文集刊行会編『日本文芸思潮史論叢』ぺりかん社、2001年3月)。

(27) 『日本後紀』巻七・延暦十七年四月記事、巻十二・延暦二十三年春正月記事など。

は東アジア仏教圏に見える感応譚を享受しつつも、読経による諸仏との直接的な感応のみを語るのではなく、病者の信心を援助する人々の姿をそこに示したものとする。

7 おわりに

本稿では、『靈異記』下巻第十一縁と「郷歌」、「禱千手大悲歌」との比較を起点として、東アジア仏教文化圏における盲目譚を取り上げ、病における信仰と願の共通性とそれらを救済する方法の描き方を検討した。比較対象とした「郷歌」の場合、娘の盲目は後天的なものであり、千手観音への帰依と歌によって娘の眼は治癒され、願を込めた歌によって観音と通じたと称賛する。一方『靈異記』の場合、母の盲目は宿業から来る先天性のものであり、この宿業を認識を通して薬師仏を信仰するが、壇越の介在や桃脂といった事物などを媒介とする。『靈異記』の他の盲目譚・宿業による病もこれと同様で、病者の至心にあわれみを持った人々が病者に対して働きかけをするのである。

無論、現実において個人の信仰の深浅によって病が治癒することは無く、宿業も病者自身に向けられた観念というより、病の原因を説明し得ないことに起因する言説であるから、仏典の内容は信徒を獲得するための方便ともいえる。『靈異記』においても、様々な靈異を示して仏教の験力を人々に知らしめることが書物の特徴としてある。その上で『靈異記』の病治癒譚は、漢訳仏典の世界における信仰の様相を基盤とし、種々の経典の効能を記しながら、諸仏への至心とそれに心動かされた周囲の人々の援助を媒介させる展開を形成していた。『靈異記』の盲目説話は、東アジア仏教圏の感応譚を享受し、そこに人間の善行を奨励させるための意義を持つ説話であると位置づける。

